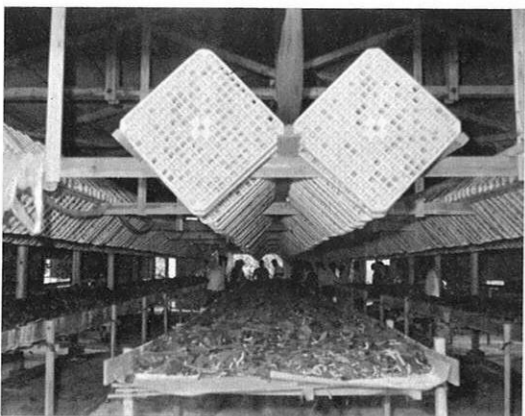


くまもとの特産

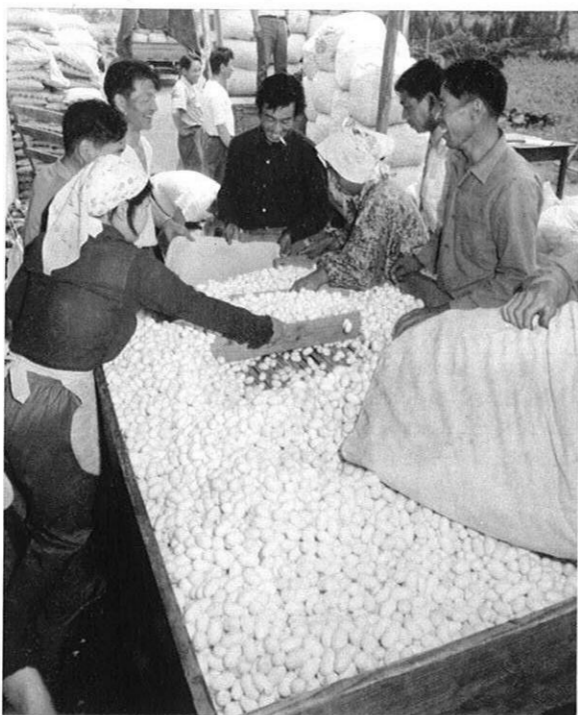


▲桑園栽培も順調だ。遠くに五岳がかすんで見える。

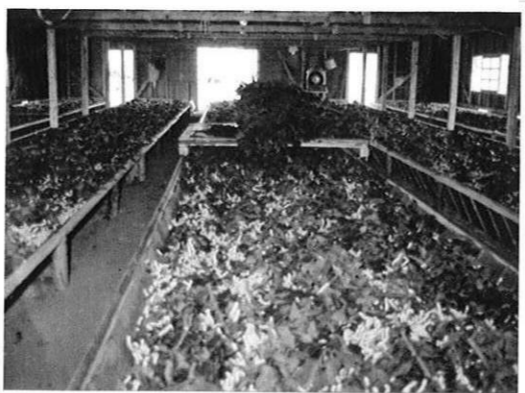
▼省力養蚕のおかげで上簇も合理的になった。



▼きょうは出荷日…明るい声ははずんでい。



▲純白の繭が秋の日にまぶしい。繭の検査風景。



▲蚕室の施設も滑車が入ったりして手入れも楽になった。

▼出荷前の繭の手入れ…収穫のよろこびが…



成果をあげた高原地帯養蚕

阿蘇郡産山村の養蚕

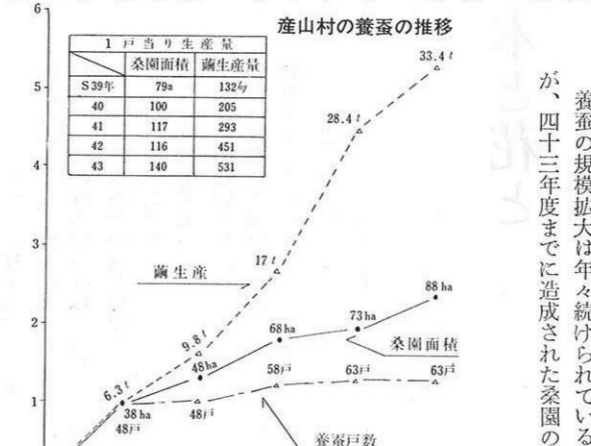
本県の養蚕の新しい方向として、標高五百までの山麓高原地帯を中心に、桑園が集団的に生れつつある。その中の産山村にスポットをあててみることにした。

産山村の耕地は総面積のわずかに九割に過ぎず、山原原野が八割を占めている。高原低位生産地帯で、標高は六百〜九百メートル、人口二千八百人で、農家戸数は四百三十戸である。一戸当りの耕作面積は百三十アールであるが、圃場数も多く分散し、労働時間の多い経営である。

このような村内の畑作状況から、畑地の七〇%を占める産山南部地区の畑作振興対策について真剣に協議を重ねられ、大規模草地改良を別途に実施するほか農業構造改善事業を受け入れるべく主幹作目が検討された結果、「米プラス養蚕」の経営形態が最も適するとの結論が出された。そして、養蚕に意欲的な四十八戸が三十七年に原野を開いて十八ヘクタールの桑植付を行ない、産山養蚕振興会が組織された。

水田の六〇%は開田で、時間給水の干ばつ田であるとともに五年に一回は冷害も受け、年によっては保有米の確保がやっとならぬ。畑作の主なものは陸稲、とうもろこし、菜種、そ菜であるが地方の劣る火山灰地帯で生産性が低く、十アール当りの収量は、陸稲で二〜三俵、とうもろこし、菜種で五千円、そ菜で一萬〜二万円程度で、市場へも遠く低収入である。原野利用による和牛も価格の変動が大きい上に経済力の乏しい農家が多いため、家畜導入資金も検討されながら「無家畜農家」「牛小作」の解消も実現しな

かった。農家の農業所得は一戸当り平均三十万円で、低所得の苦しい経営であったので、営農の立て直しのため、茶の作付奨励、高冷地そ菜の導入など努力がなされたが、流通面の不備から耕作者も減少して目的を達成することができなかった。



飼育施設については、建坪二百八十八平方メートルの稚蚕共同飼育所と、壮蚕共同飼育所三十棟を設置。桑園管理用小型トラクター二十台を導入して、一貫した養蚕の共同作業と、機械利用による省力技術の近代的養蚕体系を打ち立てることができた。

養蚕の規模拡大は年々続けられているが、四十三年度までに造成された桑園の面積は八十八ヘクタールとなり、全く養蚕のなかった村が五カ年にして三万三千四百七十キロの繭生産地となり、約三千二百四十六万円の繭代金が農業所得の増加となって養蚕農家を潤おしている。

繭生産量の多い農家は八百キロ以上の農家が十六戸で、粗収入百万円以上が八戸あり、一戸当り約五十二万円の粗収入である。また、桑園十アール当りの粗収入は、未成桑園を含めて平均四万円になり、養蚕の収入で農家の経営は大きく改善されることとなった。

今後の振興計画としては、高原農業開発事業の推進とともに、県および村の単独事業を積極的に導入し、昭和六十年目標に集団桑園二百ヘクタールを完成することとなっている。この時点における村の農業生産額の見通しは、畜産三億九千八百万円、養蚕二億一千九百万円、米一億六千三百万円で、養蚕が村農政の支柱と目されている。

(蚕糸特産課)

が、他作物よりはるかに有利な好成绩を納めることができた。

農業構造改善事業は、昭和三十九年度から実施に入り、三カ年で生産を飛躍的に

機械化による近代養蚕

に向上させ、主産地形成をかりつつ農業の自立化を確立することとし、最終年度の昭和四十一年までに六十八ヘクタールの近代的集団桑園が造成された。